

魔除けとしての公共

寺江圭一朗

概要

長崎島の芸術祭に参加した経験を元にし、公共性と芸術の問題について焦点をあて議論を進めている。序には、その背景にあたる部分がかかれており、1章で、壱岐の歴史と法案などについてのリサーチに触れている。2章では公共性について芸術で考えるための方策を、いくつかの例から探り、3章で実際のプロジェクト案に触れている。4章では、実際の滞在を通し経験したことを元にし、公共についての私見を述べている。結論としては、3章で紹介している「三味線通り」という提案行事に触れ、作品ではなく提案という方法をとることで、一方的な提案だが、一方的な作品ではないという形式をとることで、一定の公共性の確保を試みたことが述べられ終えている。

目次

序

本論

1章 壱岐の歴史や政治

1-1 芸術祭におけるリサーチについての私見

1-2 壱岐でのリサーチ

1-2-1 古代

1-2-2 元寇

1-2-3 現代

1-2-4 未来

1-3 長崎島の芸術祭

2章 芸術と公共性

2-1 文化芸術基本法

2-2 芸術作品について

2-3 公共性と芸術に関する問題を扱う作品

3章 壱岐でのプロジェクト「ケーマゲヒンマゲ」

3-1K 地区で店を開く

3-2 ひきとおし

3-3 ケーマゲヒンマゲ

3-4 三味線通り

4章 魔除けとしての公共

4-1 変化する公共

4-2 壱岐での観察と、プロジェクトの実行から考えたこと

結論

序

昨今の公共性と芸術に関する問題は、芸術祭の企画制作において無視できない問題になっている。その応答として、2019年10月8日に「あいち宣言・プロトコル」の草案¹が提出され意見交換がされた。その後、最終案²が12月18日に公開。草案で触れられていた「鑑賞者及び協力者の権利及び責務」は最終案で消されている。私はかねてより、芸術関係者ではない方の芸術の受容の仕方に関心があったため、この宣言でどのように鑑賞者や協力者の権利責務を規定するのか注目していた。また、あいちトリエンナーレでの一連の事件は、美術史の中に芸術外部の人の意見が入りにくいことを見ても分かるように、今まで芸術が無視しても問題のなかった人々が、突如現れてしまい対応できなかったことの現れではないかを見ていた。私はこれに期待していたのだが「鑑賞者及び協力者の権利及び責務」が消されたことは、仕方がない側面もある。芸術を受容する人をどのように規定するかは、公共性と芸術の問題をそのまま解決し表さなくてはならないようなことだと考えるからだ。また、公共性を考える視点は多数あり、広い分野の学問に及び議論されていることから、公共を定義すること自体が難しいということの現れだったのではないかとも思う。しかし、このことについて芸術内部で議論し一定の定義を示すことなしには、公共性と芸術に関する問題への応答にはならないのではないかと私は考える。

私は「長崎島の芸術祭 2019」という地域芸術祭への参加の打診を2019年4月に受けた。プラン作成の段階で以上のような出来事があったことから、そのことを踏まえ思索すること自体を企画案とし提出した。この芸術祭は、離島活性化交付金、文化芸術想像拠点形成事業などの公金が助成されており、公共の利益に寄与することが目されていることもあり、あいちトリエンナーレとは予算規模は全く違うとはいえ、私も芸術に関わる当事者として、この問題に取り組む必要があると考えたからだ。また、予算のことや芸術祭の大小は、芸術をするものには関係があるかもしれないが、芸術を受容する側には関係がなく、芸術祭は全て同じものだと見られる可能性があることから、私がプロジェクトを通して関わる人々の範囲だけでも、その説明を果たす義務があると考えた。

本稿では、以上のような背景から私が考えたことや取り組みを中心とし、公共性と芸術に関する問題の一部分について、一定の解決案を提出する試みである。また、芸術と公共性を考える上での広範な議論ではなく、一事例であり、今後も重ねて検討する必要があるものであることを予め断っておく。

¹ あいち宣言アーティスト草案(2019年10月8日)

<https://aichitriennale.jp/news/item/01%20%E3%81%82%E3%81%84%E3%81%A1%E5%AE%A3%E8%A8%80%EF%BC%88%E5%88%A5%E6%B7%BB%E8%8D%89%E6%A1%88%EF%BC%89.pdf>

² 「あいち宣言・プロトコル」の最終案

<https://aichitriennale.jp/news/item/%EF%BC%88%E5%88%A5%E6%B7%BB%EF%BC%91%EF%BC%89%E3%80%8C%E3%81%82%E3%81%84%E3%81%A1%E5%AE%A3%E8%A8%80%E3%83%BB%E3%83%97%E3%83%AD%E3%83%88%E3%82%B3%E3%83%AB%E3%80%8D%E3%81%AE%E6%9C%80%E7%B5%82%E6%A1%88.pdf>

本論

1 章 壱岐の歴史や政治

1-1 芸術祭におけるリサーチについての私見

地域の芸術祭に呼ばれ、ヨソモノとして入ってくる芸術家は、どのようにその場所に馴染むことができるか、どのくらい場所を知ることができるのか、どの程度対象に近づくことができるのかということが、円滑な企画制作や住民への説明には欠かせないことだ。

またこう考える背景には、企画や表現のための素材としてのリサーチをし、創造するということを目論むだけでなく、芸術祭や表現を通して暴力的な行いにならないための倫理的な規制がかかっていると考えるからだ。芸術における研究倫理規定のようなものはまだ示されていないが、他者に近づくということを基準にし、報道における倫理規定のようなものは設定できるのではないか。このことについても公共性と芸術の問題への応答と共に進められるべきだと私は考える。

都市の記憶や保存について研究したハイデンの「場所の力」³には、「あなたがロサンゼルスを理解するには5年かかるか、あるいは10万マイル走破することになるでしょう。」とある人に言われ、5年かけて悪戦苦闘して場所を理解しようとしたことが書かれている。このような、社会学者や歴史学者のような仕方でも、時間をかける研究態度というのは、実際には倫理として、美術においても採用されている部分はあると思われる。しかし、多くの芸術祭では、時間の制約、人員不足、予算不足などから、そのような態勢はほとんど整っていないのではないかと私は思う。私が参加した長崎しまの芸術祭においても、潤沢な予算がなく、限られた時間の中で作家個人の力量を示さねばならない内容となっていた。このようなケースは、一部の社会を志向するタイプの作家にとっては、リサーチ不足に陥ることが考えられ、非常に危ない綱渡りのようなプロジェクトになりかねない。これは特段珍しい条件ではなく、作家、キュレーター、地域、鑑賞者などは、いつもリスクを引き受けながら芸術祭は進められていると私は見ている。

1-2 壱岐でのリサーチ

壱岐でのリサーチは、私が依頼を受けた2019年4月より始め、現地滞在、と郷土史、インターネットを通じて行った。地域はどこも複雑だが、それは壱岐島も同じだ。なるべく、第一印象で制作を開始することを避けるため、壱岐について全体的な調査を行った。そのため、一つを深くリサーチするものにはなっていない。またこれから見ていくように、壱岐には様々な歴史があり、現在も様々なことが起こっている。それらはその一つ一つが一生をかけて研究するような種類であるため、私が結果としてアウトプットしたプロジェクトは、それらを総括するようなものにはしていない。このことについては第三章で触れる。「長崎しまの芸術祭2019」は、他に対馬、五島でも行われ

³「場所のカーパブリック・ヒストリーとしての都市景観」ハイデン、ドロレス【著】学芸出版社（2002年3月）

ているが、本稿では、私が参加した「アーティスト・イン・アイランド@壱岐」展に焦点をあてている。この章では壱岐の歴史や現在起こっていることについて触れ、この芸術祭が題材として射程できる範囲の広範さを示しておきたい。

1-2-1 古代

壱岐の歴史を紹介する一支国博物館では、古事記や魏志倭人伝に壱岐のことが書かれていることから、古代の壱岐の様子に触れ、現在の壱岐に繋げるような内容で展示がされている。島内には6世紀末から7世紀初めに築造された280基以上の古墳群が存在し、現在でも発掘調査が進んでいる。また、現在でも長崎県で二番目に広いとされる深江田原平野で繁栄を築いた原の辻遺跡がある。これは朝鮮通信使の通り道だった王都跡でもあり、諸国との窓口役として果たしてきた歴史は、今後の韓国日本の関係を考える上で重要な文化遺産となっている。また、これは古代よりも随分新しい歴史についてだと思うが、壱岐の郷土史家、山口麻太郎⁴氏によると島内には1000社以上の神社、祠があるという。壱岐神楽など、希有な行事が今も残されている。壱岐の住所には浦か触(ふれ)というどちらかが付いている。浦は港、触は山だと言う。神社は浦と触ごとにあるとも聞いた。氏神というのは全国的にある習わしだが、壱岐ではそれがかなり細分化されている。そのため多数の神社があり、小さな単位でのコミュニティになっていると考えられる。

1-2-2 元寇

また鎌倉時代の、元寇による二回の襲来で壱岐は壊滅的な打撃を受けた歴史がある。そのため、長崎、佐賀、福岡などから移民としてたくさんの方が壱岐に渡っている。驚くべきことに、このことは現在にまで影響を与えている。江戸時代に平戸藩、松浦藩、筑前福岡藩などで領土争いがあり、結果平戸藩が統べることになったことから、福岡ではなく長崎になったという歴史⁵や、狭い島内で地域ごとに風習や方言が違うことにも残されている。他に三重や京都などのルーツについても聞いたが、これは芸者を呼んでいたことからだと推察されている。勝本地区では、漁師が京都から芸者を呼んできて婚姻することが多かったそうで、現在でもこの地区だけ京都訛りが残されている。

1-2-3 現代

第二次世界大戦中は、国境の防衛ということから、大日本帝国陸軍により要塞が築かれていた。現在も東洋一と言われた黒崎砲台の跡が残っている。島内への集中爆撃も無かったため、この砲台は一度も使用されることなく撤去されている。地域住民の話では、海で釣りをしていたら、爆弾を落とされたなどのエピソードは残っているようだった。

また日本の敗戦直後、徴用工の人達が引き揚げる船が遭難し、壱岐の芦辺港に168人の遺体

⁴ 壱岐市立一支国博物館 壱岐の人物伝情報

<http://www.iki-haku.jp/museumInet/ikf/hfiGet.do?sessionId=CBAD698D1427BBCCED3830A48C1A6C86?id=12>

⁵なぜ、壱岐は長崎県になったのか。<http://www.ikishi.sakura.ne.jp/hatashinryaku.html>

が打ち上げられている。この遺骨返還問題は現在も政治的に利用されているようだ⁶。遺骨はいくつかの場所で保管されてきたが、現在は遺体が流れ着いた芦辺浦にある天徳寺に安置されている。この遭難に関連して、帰国船が台風で停泊していたが、住民がロープを切ったことで遭難したのではないかというドキュメンタリーが韓国で制作されている⁷。このことが影響しているか分からないが、嫌韓の層が一定数おり、韓国人観光客もあまり見ることがない。

戦後も国境を守るという国の意向は続いている。平成 28 年に制定されている有人国境離島法⁸では、「我が国の領海、排他的経済水域等を適切に管理する必要性が増大していることに鑑み、有人国境離島地域が有する我が国の領海、排他的経済水域等の保全等に関する活動の拠点としての機能を維持するため、有人国境離島地域の保全及び特定有人国境離島地域に係る地域社会の維持に関する特別の措置を講じ、もって我が国の領海、排他的経済水域等の保全等に寄与することを目的とする。」とある。これは主に雇用拡充や移住者の受入れに対し補助金が出ており、人口減少を抑えるということが目的になっている。こうして、国防という観点は元寇依頼の歴史から脈々と、住民に刷り込まれているように私には見えた。

国防への意識の具体的な現れとして、消防団があると思われる。壱岐の消防団はたいへん活発に行われているだけでなく、消防操作大会での競技では優秀な成績を残し連覇を成し遂げている⁹。消防出初式の様子を見学した私は、一般市民による敬礼が何度も行われている様子に困惑したが、壱岐の歴史の総括が現れているようにも感じられた。

1-2-4 未来

壱岐では、先に触れた有人国境離島法だけでなく、様々な補助金が出ている。その中でも特筆すべきなのは、地方創生支援事業費補助金¹⁰として交付されている自治体 SDGs モデル事業¹¹で莫大な金額が動いている。その為、島外からエネルギーや教育、農業、雇用拡充などの分野のプロフェッショナルが集まってきている。この SDGs は 2015 年に国連総会で採択された、持続可

⁶ 引き揚げ遭難者遺骨、韓国への返還めざす壱岐で慰霊祭 朝日新聞 2019 年 10 月 11 日 <https://www.asahi.com/articles/ASMBC2GHPMBCTIPE002.html>

⁷ 芦辺浦天徳寺で上映会があり鑑賞した。80 年代に制作された番組のようだったが、作品名などをメモしておらず、ネット上でも確認できなかった。日本人の解説者がロープを切ったということを書いて韓国国民の感情を煽る内容になっている。その後同内容で、誤解を与える部分が改められた番組が最近制作されている。こちらでは、ロープを切るという内容はなく、芦辺浦の人に助けられたという証言をもとにした内容になっている。「1945 壱岐島」韓国 KBS テレビ (2018 年 12 月)

⁸ 内閣府総合海洋政策推進事務局 有人国境離島政策推進室 https://www.cao.go.jp/yosan/pdf/h30/29012900_naikakufu_kokai_sankou1.pdf

⁹ 壱岐新聞 芦辺地区第一分団ポンプ車8連覇 <http://iki-guide.com/?p=5125&>

¹⁰ 地方創生支援事業費補助金交付決定額 <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/tiiki/kankyo/teian/pdf/koufuketteigaku.pdf>

¹¹ 長崎県壱岐市 SDGs 未来都市計画 <https://www.city.iki.nagasaki.jp/material/files/group/7/03SDGs.pdf>

能な開発目標と言われるものだ¹²。これは 2030 年の地球環境を懸念し、2020 年から 10 年で達成していくべき 17 目標として示された。この中には、貧困をなくそう、飢餓をゼロに、気候変動に具体的な対策を、人や国の不平等をなくそう、ジェンダー平等を実現しよう、平和と公正をすべての人に、などの目標がある。目標だけを見ると、理想的なことが掲げられており、今までにもあった、平和、自由、平等などの理念と同じようなことを再度掲げているようなところがある。そこに、現在の壊滅的な自然環境というストーリーが加わり、それらを解決するために、平等や平和の重要性が改めて説かれている。

この SDGs のモデル事業として交付金が降りているのが吉野市だ。そのため、吉野市の住民は他の地区と比較すると、十年後の未来を想像する機会が多いと思われる。SDGs の目標の中には、海の豊かさを守ろうというものもある。吉野の SDGs 未来都市計画には、これにあたるものは見られないが、これが吉野で一番実感されていることではないかと私は推測する。吉野の経済は漁業と農業に支えられてきたが、近年漁獲高が下がってきているからだ。歴史的には鯨組という組織が江戸時代にあり、そこから派生する文化が多様にある。現在に伝わる祭りも大漁祈願を含むものが多く、地球環境の変化による漁獲高の減少は、経済だけでなく文化にまで波及する恐れがあることが見えるからだ。しかし、漁業の変化は今に限られたことではない。鯨のあとにはイワシ漁が盛んになり、高度経済成長期にはアワビやウニ漁が盛んだった¹³。最近では鰯が釣れることで有名だったが、今年は餌となっていたイカも減っていることから釣れないとも聞いた。この背景には、海底にあった藻がここ三年で全て消えたということが、大きな変化としてあるようだ。潜水漁をする方へのインタビューでは、昔は浅瀬から沖までずっと藻があったそうだが、海底はキレイな砂地にすでに変わっている。また、セメントに使用する海底の砂を大量に何年にも渡り掘削していることの影響ではないかという話も聞く。海砂採取の報告書¹⁴によれば、コンクリート用の細骨材のほとんどが海砂であることが示されており、1940 年代からすでに福岡で掘削されていることが分かる。同報告書の結論では「沿岸海域における無秩序な海砂採取は沿岸環境に少なからぬ影響を与えることは十分予想できることである。従って、この環境問題がクローズアップされる以前に、あらかじめ「沿岸環境保全と調和した海砂採取を今後どのように行うか」という問題を提起し、それを解決するために系統的に資料を収集し調査・研究を行うことは大変重要である。」とある。1994 年の論文である。昔の鯨組時代にあったハザシ唄など、漁の中から生まれた文化は無くなってしまっている地域がすでにある。今までもずっと生活や経済の変化により、伝統文化は影響を受けていたのだ。これから先どのように変化していくのか懸念される。

1-3 長崎島の芸術祭

長崎島の芸術祭の助成元の一つである離島活性化交付金は、離島振興法を踏まえ創設され

¹² 2030 アジェンダ 国際連合広報センター

https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/

¹³ 郷土史わたら 【著】竹下力雄

¹⁴ 西日本沿岸域における海砂採取の現状に関する調査報告 土木学会論文集 1994 年 3 月

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jscej1984/1994/486/1994_486_27/_pdf

ている。離島振興法は、1953年に長崎県の呼びかけを契機に制定されているのだから、このような芸術祭が壱岐で開かれることになるのも頷ける。交付金については「海上輸送費の低減や戦略産業の育成による雇用拡大等の定住促進、観光の推進等による交流の拡大促進、安全・安心な定住条件の整備強化等、市町村の創意工夫を活かした取組を支援します。¹⁵⁾」とある。先に少し触れた有人国境離島法にも通じることだが、雇用拡充、定住促進というのは、国防という観点が少なからず含まれていると考える。

もう一つの助成元である文化芸術創造拠点形成事業の目的には、「2020東京大会とその後を見据え、地方公共団体が主体となって取り組む文化芸術事業を支援することにより、地方公共団体の文化事業の企画・実施能力を全国規模で向上させるとともに、多様で特色ある文化芸術の振興を図り、ひいては地域の活性化に寄与することを目的とします。¹⁶⁾」とある。

雇用拡充、定住促進、地域の活性化、2020年以後のことを見据えるということなど、この芸術祭や壱岐で行われているSDGsの地方創生支援事業も含め、似たような文言が助成元で並んでいることが分かる。このことは、公益性や公共性の問題と繋がっていると思われるが、芸術とどのように繋がっているのだろうか。

2章 芸術と公共性

地域の歴史や現在の状況をリサーチすることで、政治的な流れが見えてきた。そこには様々な法案が関係していることが分かる。また芸術祭においても助成金の背景となる法案があることが分かってきた。このような法案を分析していけば国が規定したい芸術の公共性は示されていると思われるが、それは先に示した、雇用拡充、定住促進、地域の活性化、2020年以後の安定といったことを示すことで、この場では十分ではないかと考える。以下では主に芸術をどのように規定してきたかという取り組みを見ていく。

2-1 文化芸術基本法

戦中、文化芸術は政治のプロパガンダとして利用されてきた歴史があるため、芸術の自由や表現の自由について最重要なことだと考えられている。その芸術を文化芸術基本法として政府が制定していることに、違和感はあるが、公共性という課題を考える場合には有用だろう。しかし、その多くは、ここまで触れてきた法案と大差ないのではないかと思える内容が含まれる。「観光やまちづくり、国際交流等幅広い関連分野との連携を視野に入れた総合的な文化芸術制作の展開」「文化芸術の固有の意義と価値を尊重しつつ、文化芸術そのものの振興にとどまらず、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他の関連分野における施策を本法の範囲に取り込むとともに、文化芸術により生み出される様々な価値を文化芸術の継承、発展及び創造に

¹⁵⁾ 離島活性化交付金 国土交通省

https://www.mlit.go.jp/kokudoseisaku/chirit/kokudoseisaku_chirit_fr_000007.html

¹⁶⁾ 文化芸術創造拠点形成事業 <https://www.chiikiglocal.go.jp/about/index.html>

活用しようとする」「観光・まちづくり・国際交流・福祉・教育・産業等文化芸術に関連する幅広い分野も含めた施策を推進するとともに、行政機関・文化芸術団体・民間事業者・学校・地域等の連携のこれまで以上の連携により、文化芸術に関する施策が更に推進されていくことが期待されます」などと文化庁のウェブサイト¹⁷⁾に掲載されている。変わり映えしないが、ここで求められていることが芸術の公益性や公共性なのだろう。しかし、ここで言われている芸術とは何を指しているのだろうか。

2-2 芸術作品について

芸術作品の根源について探るハイデガーの著書では、芸術の根源を探るために、現に見る事ができる作品を分析することで芸術の神髄を探ろうとしている。芸術そのものを直接捉えることは難しく、作品と道具の違いなどから徐々に解明していき真理と芸術について最後の章では語っている。しかし後記には「前述の熟慮は、芸術の謎に取り組むものである。芸術それ自体が謎である。謎を解くという要求は筋道を外れている。謎に遭遇することが課題となる。¹⁸⁾」とある。芸術は謎に遭遇するためのものとしてここではずっと描かれているのだ。そしてその謎は「堂々めぐり」をするように解明されず継続され、謎にとどまるのが「思索の祝祭¹⁹⁾」だと言う。これはつまり、芸術の自由について語っていると良い。この書籍でもそうだが、芸術は伝統的に芸術外部から逃れることによって自由になり自律するという働きがある。そのため、ここでは公共性という問題について描かれているはずもないのだが、もし仮に公共性と芸術の間に問題があり、その結びつきようもない謎の部分を考え続けるということであれば、「思索の祝祭」となるだろう。

2-3 公共性と芸術に関する問題を扱う作品

公共について思索した希有な作品に、岸井大輔の「東京の条件²⁰⁾」という戯曲がある。この戯曲の中には、岸井の思索がそのまま作品として現れている。そのため、第一幕の「制作者の憂鬱」では、東京都に文化事業参加の打診を受けるところから始まる。「「まちなかにアートが介在することで人が出会い、コトがおこる場を作っていく。そのパイロット事業を手掛けて欲しい」これは簡単に言うと公共を創れと言うことじゃないか」と、冒頭で公共についての問題設定がされ、公共についてや、公共を創る方法について書かれている。全五幕の戯曲だ。この冒頭部分は、そのまま芸術祭でキュレーターやアーティストが求められていることと同じではないかと考えられる。そういうつもりがないとしても、助成金が先に触れてきたような法案と関係している可能性が高いため、暗にこの冒頭と同じようなことが目されているはずだ。岸井は公共を「全員の明確な合意のもと共有されているもの」としてこの戯曲で設定している。この部分はうっかりそのまま、地方創生とか雇用拡充とかそういった法案の文言が入りそうである。しかし、ここでその成立の難しさを思索していく。街をつくる。鍋をつくる。大学をつくる。テーブルをつくる。などのアイデアを元に他者

¹⁷⁾ 文化芸術基本法 文化庁

https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/kihon/geijutsu_shinko/index.html

¹⁸⁾ 「芸術作品の根源」【著】マルティン・ハイデッガー 平凡社ライブラリー(2008)

¹⁹⁾ 「芸術作品の根源」 P13

²⁰⁾ 「あそびとつくりごと1戯曲は作品であると東京の条件とそのほかの戯曲」【著】岸井大輔 PLAYS and WORKS (2019)

との対話を繰り返す。「日本で公的可能性を試す小さな場の試行錯誤²¹」を永遠に繰り返し、その不可能性を示すことで締めくくられる。

3章 香岐でのプロジェクト「ケーマゲヒンマゲ」

私が地域芸術祭の枠組みで制作する際、いくつものプランを提出する。それは、作家の意図やその作品の素晴らしさとは関係なく、地域の意向があるため実現できない場合が多発するからだ。特に、限られた時間しか与えられないケースにおいては、これが顕著に現れてくる。その為、いくつものプランを用意し対応せざるおえない状況があるのだ。例えば、クリスト・アンド・ジャンヌ＝クロードの日本で行われた「アンブレラ」²²という代表作では、1984年に立案し1991年に実現しており26億円以上の経費がかかっていると言うのだから、時間もコストもその差は歴然だ。以下では、私が提案したプランの中からいくつか示す。

3-1 K地区で店を開く

K地区は、海士の街だ。香岐には他に海女の地区もある。この海士はフンドウを用い一気に潜水し、アワビ漁などで生計を立てていたが海底の変化と共に漁獲高が落ち、イカ釣り漁船や他の地域に出稼ぎ漁に出るなどしている。元々は豊臣秀吉が朝鮮出兵の際に福岡県鐘崎の海士に水引案内人をさせた褒章としてK地区に土地を与え墓をつくることを認め、香岐島全域の潜り漁の漁業権を与えたことがルーツとなっている。この地区は、被差別部落のような扱いを受けており、現在でもあまり良い印象を持たれていないようだった。誰に聞いても難しい顔をされた。バブル期のアワビ漁が盛んな時には、かなり稼いでいたようで、その妬みは今もあるようだし、漁師街特有の荒くれのイメージもあるようだ。しかし、漁業の衰退と共に街も衰退し、一件の店もない状態だった。それから、この地区のことを調べると、いくつかの無くなってしまっている伝説があることと、一昔前まではあった地域行事も無くなってしまっていたことが分かった。

現在の物語には残らなかった、無くなってしまった物語をくみ取り、その物語の中に地域の固有性を見つけることができたなら、どのように現在と結びつき、場所の力として発揮されていくのか、という提案をするための拠点として、店を開くプランを提出した。また、この地域には海士がおり、香岐の中でも問題になっている海底の変化に詳しい人達がいるため、現在の物語についても教えてもらい考えることができると考えていた。港の中央に位置する場所に元タバコ屋の空き店舗があり、そこを拠点として選定した。しかし、持ち主を探し出し交渉したが、借用決定の直前で借りることができなくなった。他に、地域の公民館も、数名いる役員の全員一致が叶わず借りることができず、店をつくるプランは断念することになった。関係性の構築が上手くいっていなかったと

²¹ 「東京の条件」第五幕

²² アートスケープ「アンブレラ・プロジェクト」

<https://artscape.jp/artword/index.php/%E3%80%8C%E3%82%A2%E3%83%B3%E3%83%96%E3%83%AC%E3%83%A9%E3%83%BB%E3%83%97%E3%83%AD%E3%82%B8%E3%82%A7%E3%82%AF%E3%83%88%E3%80%8D%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%83%88%EF%BC%86%E3%82%B8%E3%83%A3%E3%83%B3%E3%83%8C%3D%E3%82%AF%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%89>

はいえ、公民館が借りることができないということは想定外だった。後になってK地区の役員関係者に聞くと、中で目立つ動きは基本的に良く思われぬとのことだった。確かに、今までの歴史や回りから見られているイメージを考えると、目立つことをすれば、他の地域からどのような目で見られるかは分からないという考えになるのかもしれない。役員の全員一致という仕組みも、街を守るという観点を考えれば、私のようなヨソモノが芸術で何をするか分からないのだから、排除するのは真つ当かもしれない。

先に神社の例で触れたが、小さいコミュニティで分かれている分、関係性が深いという特徴が壱岐にはあると感じた。そのため、伝統文化も残りやすいという特徴がある。しかし、SDGs や昨今の多様性を求める動きは、壱岐でも進んでおり、地域差はある。

3-2 ひきとおし

壱岐の伝統郷土料理に、ひきとおし鍋がある。昔は多くの家庭で鶏が飼われていた。卵を産む鶏は大切な資源とされていたのだが、大切な客人が来る時、その大切な資源を絞め鍋にし、家の奥にひきとおすというものだった。現在では鶏が飼われている家庭はなく、スーパーで購入した鶏でつくられており、大切な資源として鶏を考えることができる人がどれだけいるか分からない。また、鶏を絞め、長時間煮込みガラスープを取り、大切な客を奥に通すというには、儀式的な意味合いまで含まれるのではないかと思うほどの工程があったが、客人を奥に通すということには、現在のニュアンスとは随分違いがあるのではないか。そのため、海の変化から漁獲高が落ちているアワビなどを使った海鮮ひきとおしというものを提案し、鍋を囲み、貴重な資源や海について考える場を考えた。

しかしここでも、鶏ではないひきとおしは、ひきとおしではないという伝統を守るような力が働き、実現には至らなかった。ひきとおしは、給食でも出てくると聞いた。しかし、ここには元々の意味はない。しかし味という形式は伝統として引き継がれている。この例を考えると、伝統文化の残り方には、意味と形式の二つがあると分かる。

味という形式により、一つのアイデンティティや大切な記憶が保たれる場合もあることが想像できるので、私はどんな場合でも意味が大事だと考えているわけではない。しかし、仮に漁業がさらに衰退し漁業関係者がいなくなった港町ができたとして、そこにあった大漁祈願の伝統的な祭りなどの場合はどうなるだろうか。その時にも同じように、形式だけが残るのかもしれない。形式はどんどん簡略化される。なぜなら、そこに意味がなくなればなくなるほど、生活と切り離されていくからだ。生活に根差した文化は、意味が含まれるため、簡素化しづらいことが考えられる。

3-3 ケーマゲヒンマゲ

ケーマゲヒンマゲとは壱岐に昔あった言葉で、「物事を急造する²³」という意味がある。「郷土史わたら」でその言葉を知った。そこには伝説「かいまげ」が紹介されている。内容は、神様が鬼神に向かって、一晩で向こう岸まで埋め立てることができたら村の娘をやりとうと言ったことに鬼が喜び、

²³ 「郷土史わたら」【著】竹下力雄

さっそく石を運び工事が進む。そして夜が明ける前に完成しそうになったところで、神様はそれに気が付き、娘をやるつもりはなかったの、あわてて鶏をつついて鳴かせた。鬼は鶏の鳴き声を聞いて、夜が明けたと思い工事を中止した。という物語だ。そして、その物語の最後の所に、物事を急造するという意味の方言として、「ケーマゲヒンマゲ」と紹介されている。私は、芸術祭のことを言っている伝説のように感じ、芸術祭への批判の意味をこめて、この方言をプロジェクト名とした。上で紹介してきた店や鍋のプランもこのプロジェクトに含まれ、壱岐の滞在制作の全てを総括するものとして「ケーマゲヒンマゲ」を設定している。実際には、滞在前に、展示場所も制作場所も確保できなかったことから、ウェブサイトはその公開場所として設定することから始まっている。「ケーマゲヒンマゲ」(<https://iki.plus100p.com>)というページを立ち上げ、そこで日々の滞在を通して行ったことや、考えたことなどを公開し、芸術祭を通じた活動の全てを一般に開示する目的で行った。また、公共性について考えるエッセーを同時に掲載していった。

3-4 三味線通り

芦辺浦という街にある大漁祈願の祭りには、お囃子の中に三味線が入っている特徴的な祭りだ。芦辺浦では、たいへん大切にされている祭りだ。昔は住民による歌舞伎があったり、今も続く船を丸ごと家の中に入れ一晩過ごすなど、大掛かりな特徴もある。そのため、持続することが難しく、形を変えながら続いているという実情もある。しかし、その大部分は今も残され続けている。高度経済成長の煽りを受け、三味線方が壱岐を離れたことで、お囃子の存続が危ぶまれたことがあった。そのため昭和 48 年に文化保存の為に地域で三味線教室を開き存続したという²⁴。そのため、当時は三味線の音が通りから聞こえていたというエピソードを聞いた。

しかし、現在は三味線教室の先生が亡くなったことから教室そのものも無くなってしまっている。そのため、普段から練習しているというわけではなく、祭りの三か月前くらいから準備、練習をしているとのことだった。

このようなエピソードを元に、通りから聞こえる練習音の再現をするためのイベント提案を行った。この行事の提案をするための映像制作をするため、地域住民への説明と協力を要請し、撮影した。その後、イベント内容周知のために、映像と内容を見る事ができるウェブページを制作し、各所に QR コードを設置という運びとなった。以下に QR コード先に書いた内容を示す。

²⁴ 「あしべ今昔」【著】中村八郎(1983)

映像(<https://vimeo.com/384288320>)

タイトル: 芦辺浦 2030 年 1 月吉日三味線通り

2020 年 1 月制作

企画・制作・撮影・編集: 寺江圭一郎

撮影協力: 芦辺浦地区の皆様、ちんちりがんが三味線の皆様、たちまち、芦辺浦懇会、等

時間: 3 分 37 秒

【内容】三味線通りという行事の提案をした映像です。

以下、提案内容とその方法です。

三味線通り行事の仕方。

1. 内容に賛同できる方々で行う。
2. 賛同者は決められた時間に自宅で三味線の練習をする。
3. 自宅が難しい場合は、どこかに集まって練習をしても良い。
4. 練習時は通りから音が聞こえるように配慮する。
5. 賛同者は皆で三味線を弾く時間を決め、どこでいつ音がなるかを考える。なるべく同一時間にいくつかの場所で音がなるようにデザインしたほうが、より三味線通りの雰囲気が見れやすい。
6. 時間と場所が決まれば、各所に三味線通りという行事をすることをお知らせする。他のイベントとの連携で行うことができれば、より効果的に周知できる。

【制作意図】

この提案は地域の方のお話を元にして制作されました。主に三つの話が制作のアイデアになっています。昔。今。未来。の三つの話です。

《未来》 香岐では二〇三〇年のことを想像させる SDGs の活動や事業がたくさんあります。そのことから、香岐に住む方々は比較的、他の地域と比べて、未来について想像する機会が多いのではないかと考えます。僕は、この提案のタイトルに二〇三〇年と入れています。ですから、これも未来のことを想像した提案です。SDGs は、このままでは地球がダメになりますよ、という現在の社会への批判です。しかし、ここには文化は含まれていません。ですが、文化も自然環境のように、徐々に持続が難しくなるかもしれません。その為、十年後の未来でも、地域に文化が根付いていけば良いなという希望から考えた提案でした。

《今》 祭りの直前でないと練習できていないという声を聞きました。それで、練習をするきっかけにもなるし、ついでにその練習の音が行事になるなら良いのではないか。という視点からの提案でもありました。この視点では、練習のきっかけづくりという意味合いがあり、これについて外部の人間が言うことは、たいへん大きなお世話だと自覚しています。しかし、そういう声の一部であったことは事実であるため、その声への応答として活用してもらうこともできると思いました。

(※ここでは、祭りについて少し触れていますが、この提案は、祭りに関する提案ではありません。あくまでも、三味線の練習音を使った、生活音の再現や、そのことへの気づきを与えるものであったり、練習音を使った行事の提案という意味です。)

《昔》 三味線教室があり、その頃は通りから音が漏れていたという話を聞きました。それで、通りから音が聞こえていた時はどんな街だったんだろうか。僕も聞きたいな。と思ったということから提案しました。また生活の中から聞こえてくる音は人々の記憶にたいへん重要な要素だと思います。一時的にその音を再現するという事は、当時の生活を想像することでもあります。それは、地域の伝統文化について考えることと同じだと僕は思います。

【制作背景】

この映像は壱岐で開催された長崎しまの芸術祭 2019 に参加した作者が、芸術における公共性をどのように実現するか、または実現できないかを考えるためのプロジェクト「ケーマゲヒンマゲ」の一貫として、2020年1月に制作しました。(※ケーマゲヒンマゲは壱岐の古い言葉で物事を急造するという意味です。昨今の急造ばかりの芸術祭への批判としての意味合いが含まれています。)

壱岐市芦辺浦に昔あった三味線教室がある頃、通りからは三味線の音が聞こえていたというエピソードを聞きました。そのエピソードを元に、芦辺浦に三味線通りを出現させる行事を提案しました。SDGsに沸く壱岐市ですが、文化についても考えねば消えて無くなってしまおうとの思いから、2030年に向け三味線通りが定着していくことを想像し、このタイトルを付けました。本当に三味線通りが現れるかどうかは、この提案を見て下さった地域の方に委ねられます。作者の一方的な提案ですが、一方的な作品ではないという構造を用いることで、芸術における公共性を確保する方法を模索した作品映像となりました。

【参考】

祭り囃子三味線教室のおこり

芦辺お祭り囃子で三味線方の役割は大きい。昭和三十年代、高度経済成長のあおりをくって、三味線をひく芸人が都会に出たので、多額の金と労力が大きくなり、一時は取りやめになるかと心配した。浦会・青年会・婦人会で何度も話し合い、郷土文化お祭り囃子保存の為、浦会で三味線教室を開設して、地元の女の方に習い取ってほしいとお願いしたが仲々人が集まらず、色んな問題で苦勞した。

あしべ今昔 昭和58年3月1日発行 著者:中村八郎 より

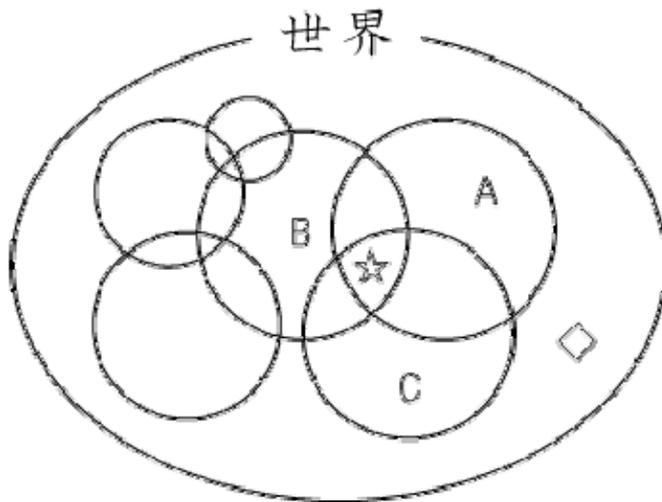
三味線教室は昭和四十八年に開設とこの郷土史には書いてあります。地元の方の話では、Nさん、Kさんと言う二名の三味線の先生がいたとも伝え聞きました。現在は教室こそないですが、この教室立ち上げ時に若くして参加していた方々が中心となり、芦辺祭の前には若手に三味線を教えているそうです。芦辺浦にはその時期、三味線通りが立ち現れているかもしれません。

4章 魔除けとしての公共

公共にはいろいろな捉え方があるようだが、公共をどのように捉えているかの説明が芸術内部からも議論される必要があるように思う。あいちプロトコルでは、結果的にこの部分に触れることができず、そのため今後も同じ問題が続くことが懸念される。

ここでは香岐での私の観察を通して、コミュニティについて図式的に解釈し、新たな公共のイメージを示してみたい。

4-1 変化する公共



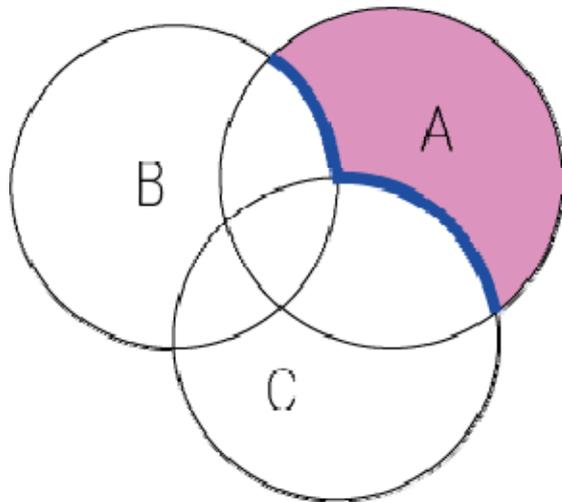
(図1)

図1の「世界」には、全体、国など、ABCより大きな枠組みのものを代入できる。簡単に考えられる公共のいくつかのパターンを見てみる。

- ①ABCの公共はそれぞれ違うと考える。
- ②ABCに共通する部分☆を公共と考える。
- ③ABCと重ならない部分◇を公共と考える。

このように同じ図式の中でも、どこを公として設定するかで、「皆の共通理解」としての公共は変化することが分かる。

また、BはACと比べて他の領域と重なりが多いので多様性があると考えた場合に、重なる部分が多いか少ないかということで、公共として考えられる範囲が変化することも想像できる。また☆か◇のどちらを公共と捉えるかが、ここに加わることで簡単に複雑になってくる。



(図2)

図2のピンクの部分に A 地区固有の要素と考へてみる。固有の要素は、例へば A 地区の伝統文化に現れる。伝統文化の維持には、住民の共同・協同が必要になる。この共同・協同の過程で外部との差が地域に生まれるのではないかと仮定する。先に例として挙げた①②③のケースで公共を考へた場合、どれも外部との間に境界線がある。この境界線を「魔除けとしての公共」と仮定する。

私は地域の祭りが維持される様子を観察し、公共を 1 つの魔除けと捉へることもできるのではないかと考へた。隣街の人は知らない「皆の共通認識」がある地域でできる時、それは、その地域に公共性の高い何かができたと考へるのではないかと。

4-2 壱岐での観察と、プロジェクトの実行から考へたこと

コミュニティの伝統を守るためにコミュニティを閉じるような作用と、コミュニティの経済を守るためにコミュニティを開くような作用とが矛盾を孕みつつ、同じ地域で起こっているということが、壱岐では起こっていると感じた。この守るような雰囲気が残っていることによつて、伝統文化が多く残る地域になっていると私は考へるが、この雰囲気がない地域では、すでに伝統はかなり消失してしまっていると言へるかもしれない。

地域の視点から、私のプロジェクトや芸術祭を考へた場合、単に変な関わりにくい人が来たと思われただけでなく、金にも繋がらないという、伝統文化にも経済にもどっちにも役に立たないものと捉えられそうだ。私の芸術というものは、だいたいそういうもので、コミュニティが一目散にパスするような、利益のない有害なものかもしれない。しかし、実際には、外の目から見た地域の魅力を再発見するような視点を使いアイデアを出すという、いわゆる観光につながるような視点も踏まえつつ、三味線通りの提案をしたとも言へる。これは、U ターンや I ターンで島に戻ってくるような人達も持っていると言へて良い視点だ。地域の特徴や問題点を客観的な視点から改善に導こうとするもので、住民の地域認識に揺さぶりをかけ、ときに地域活性という変化を期待させる動き

に繋がる。私は、このような活動の中から、地域の公共性という、公民館を単位とするような、ある特定の地域内の共通認識の形成の仕方や、その不可能性のようなものに焦点をあてた。

公共と言ったときに、いろいろな偉い人がたくさんのことを考えており、下手にこの単語を使うと、どういう意味で言っているのかと問われ、何も言い出せなくなりがちだが、私は、そのことについて真正面から取り組めるような知識を持ち合わせてはいない。なので、公共と言わず、単に、「地域の人達」「住民」などと簡単な単語に置き換えるべきかもしれない。しかし、芸術祭に参加するという事は、この昨今の状況を踏まえ、芸術がどのように公共と関係しているのか、関係できるのか、できないのかについて考えなくてはならない。それに、公共というのは本来、もっと自由に開かれた間であるべきだ。なぜなら、公共は皆のものだからだ。

公共と言うからには、それは、皆がある程度、認めることができるような、「それでOKです」と思えるということが大事なようだ。ある人が、「それはNOです」と言いはじめれば、協働で何かをつくりあげることができなくなり、公共性の高い何かは生まれてこないからだ。

ある程度納得しあって、協働してつくり上げていく地域の行事として、祭りがある。だから祭りは、地域にとっても住民にとっても大変公共性の高いものだと言える。また、祭りは、地域にとって大事なものであり、地域の個人個人が守りたいという気持ちになることで、初めて受け継いでいくことが可能だ。一人で祭りを守ることは通常できない。ほとんどの住民が、「あの祭りはめんどくさいから辞めよう。儲けにもならないし。」と、思うようになれば、無くなっていくということが、むしろ公共的な判断となる。

祭りは、魔除けのようなものだと私は考える。実際、安全や豊穡を祈願したりするので、そもそも魔除けなのだが、それだけではなく、祭りは地域のコミュニティをより濃く、結びつきの強いものにし、外と内をつくる作用があると考えられるからだ。そうすることで、外の変な人間を察知できる地域の目のようなものが出来上がり、安全がつくられ、魔除けになる。そのような祭りの効果はあると思う。より純度の高い公共というのがあったとしたら、こういった閉じた村のような状態の中で観察できることなのではないかと考えている。また祭りは、その最も重要な公共的な現れだと考えることができるのではないか。祭りのように、住民の総意で準備される、公共化される過程で、外と内ができあがるのではないか。

その濃さを薄めるかのように、それと矛盾するように、多様な人が入ってくるということが、経済と地域の活性化に必要で求められている。この外からの微小な変化の揺さぶりをかけることで、公共をつくる過程で生まれた外と内が、何となく薄まり、それによって全体主義的な雰囲気から逃れることができているだけではないか。という乱暴な仮説未満を立ててみた。

公共という言葉で、全ての人や全体に関係あるものとして考えることは、難しいというだけでなく、そもそもコミュニティは様々なレイヤーでできているのだから、国や県や人種や性差などのようなものでカテゴライズして単純化できるものではない。その複雑なものを、唯一単純化して見ることができるかもしれないのが、特定の地域に絞るとか、祭りという行事に絞るとか、小さな区分で公

共について考えてみるということだろう。そういう方法でしか公共性を検討することは、現段階ではできないのではないか。

ここで議論しているような、小さなエリアに限定した公共性を、公共性一般と同じように並べて考えることができるかは分からないが、祭りを共同で行うようなケースでは、魔除けのような効果は現れやすいと仮定できる。これは単に共同・協同という言葉とすり替えているだけだと見られそうだが、その単語とて、小さな公共という限定された空間で行われていると言えなくもないだろう。祭りなど公共的な事業を行うことは、他のエリアとの違いを生むことになり、魔除けになるという効果を生むものだと考えてみることで、全体の公共性を担保できるものは見つからないという諦めの境地に至らなければ、言葉狩りのようなことが文化全般にまで進行してしまうことになるだけではないかと直感した。

結論

公共性と芸術の問題には、法案が示すような内容と、芸術の自由や表現の自由を志向する芸術の性質とが一致しなくなる場合があり、解決が見出せないかに見えた。しかし、従来からある、謎の中に留まるという方法で、公共について思索を繰り返し続けるという作品化の方法があることを見てきた。その方法を周到する仕方では、私は店や鍋のプランを制作しようとしていたのだがそれは叶わず、代わりに「ケーマゲヒンマゲ」というウェブサイトの中で日々、謎の中に留まるような様子を書き続けた。そして、「芦辺浦 2030年1月吉日 三味線通り」という行事の提案をした。

このプロジェクトを通して考えてきた、吉岐の歴史や現在の政治、公共性の問題ということを経括するようなものとして、この「芦辺浦 2030年1月吉日 三味線通り」はある。リサーチを通して見えてきた、伝統文化についてや SDGsなど未来に向けた視点とその問題点を内容として含め、作品化という一方的な芸術の仕方を変更し、提案に止めることで、地域住民に選択の余地を与えた。一方的な提案であり、一方的な作品ではないという方法は、芸術が公共性を実現するための一つとして、一定の視座を与えるものではないかと考える。

しかし、本稿では一部の事案に対する議論を進めているだけで、本質的な打開策を示してはいない。私は、芸術外部の人々が、どのように芸術を受容しているかに興味があり、また、それをどのように美術の歴史に組み込むことができるかということを考えている。その視点として、芸術がどのように他者に近づくことができるか、できないかということ創作を通して思索し続けている。公共性という問題とこのこととは、他者の問題で関係していると考えている。今後も、私は芸術を通じた経験から、このことについて研究を進めていくと共に、他でも似た視点から研究が進んでいくことを期待したい。

総文字数： 20296 字